



「お兄ちゃん、ほら、そろそろ東京だよ」

俺は沙依の声で目を覚ました。どうやらいつの間にか寝てしまっていたようだ。それは全員同じようで、美月とマリナ、ケイの三人も互いにもたれ合ってまだ眠っている。ジョージなどは口を開けてよだれをたらしている始末。唯一、目を開けていたのはサムである。

「起きてたのか、サム」

「ずっと景色を見ていた。緑が多くて気持ちがいい」

「そっか。このあたりは特に緑が多いからな。300年ほど前に建造物を集約した時に、植林したらしいよ。今じゃ結構深い森になってる。サムの故郷にはこんな緑は無いのか？」

「私が育った街は火星の人工都市。緑はあるけど、街路樹や公園だけ。こんな森はどこにもない」

「そっか、そういう意味では東京の臨海部と同じだな。東京湾の半分は今じゃ海上の人工都市だから。でも、都市機能の多くをそちらに移したから、旧市街は逆に緑地が増えてるんだ。住居地区は広い緑地帯の中にあるよ」

「400年前、テラフォーミング計画が失敗していなかったら、いまごろは火星もそうになっていたかもしれないけれど、植物が育つ環境が無い以上、どうしても地球のようににはならないから」

「テラフォーミング計画か。たしか、第一段階の惑星磁場の再生がうまくいかなかったんだよな」

「そう。惑星磁場なしでは太陽風から大気を守れない。せつかく大気を作っても、それを維持できない」

「でも、今ならできるんじゃないか？磁場制御の技術は当時とは比べものにならないだろ」

「問題は、磁場をどうやって永続化させるか。その結論はまだ出ていない」

「ケンジ、今の技術ならば惑星規模の磁場を作ることも可能だ。でも、作ることができるのとそれを維持できるのは別だ。常に磁場を作り続けるには莫大なエネルギーがいる。テラフォーミングを可能にするためには、地球と同じように、惑星コアを液体金属化して磁場を固定させないといけないんだ。火星のコアは何十億年も前に冷えて固まってしまっているからな。そもそもそれが火星の大気を失わせた原因だから」

「親父、詳しいな」

「あはは、俺もガキの頃は、火星に行ってテラフォーミングをもう一度、なんて夢を持って

たからな。でも、さすがに今の技術でも惑星のコアを溶かすなんてことは難しい。もし出来たとしても、それが惑星規模でどのような影響を及ぼすかは未知数だ。既に多くの人が住んでいる火星で、そんなリスクは犯せないのさ」

「タイミングを逃した・・・と？」

「そうだ。400年前の火星なら出来たかもしれないが、今ではもう数億人が暮らしている。彼らを全部移住させるなんて不可能だからな」

「そう。でも、火星も住めば都」

「だな。サムにとっては生まれ育った故郷だしな」

「そりゃそうと、テラフォーミングと言えば、アカデミーあたりじゃ金星計画の噂もあるみたいじゃないか」

「そうなのか？俺は聞いたことないけど」

「その話だったら、僕も聞いたよ」

いつの間にかジョージが目を覚ましている。

「例のプロジェクトで新しいコンピュータが動き出したら、金星大気改造のシミュレーションをやりたいという申請が理事会に上がっているらしいよ。将来的な人口増加を考えると、火星や月を含めた宇宙都市レベルではなく、惑星規模の居住可能領域が必要になるって話なんだけど、実際に1000年はかかるだろうというので、ミレニアムプロジェクトなんて名前がついているんだってさ」

「1000年か、気の長い話だな。今から1000年前と言えば、まだ産業革命の前だから、これから1000年後にどうなってるかなんて、誰にもわからないだろうに」

「まあ、逆に1000年後だったら、案外出来てるかもしれないけどね。産業革命前の人たちには今の世の中なんて想像だにできなかったみたいに、とんでもない技術が発達してるかもしれないから」

「そんな世界を見てみたいものだな。いったいどんな世界なんだろうな」

「ちよっと、お父さん、なんか遠い目になってるよ。ま、自動運転だからどうってことないけどさ」

沙依が脇から口をはさむ。うちの親父は、お袋に言わせれば、いつまでも大きな子供なのさ。またそんな子供みたいな・・・が喧嘩の時のお袋の口癖なわけで・・・でもまあ、そういう性格は俺も多少受け継いでいる。それが、無理を承知で附属高を受けた理由なのだ。ら。

そんな話をしている間に、車はハイウェイを降りて、緑地帯の中を抜け、川沿いの道を走り

出した。

「おお、久しぶりに見るスカイツリーだ」

いつの間にかケイも起きたらしい。行く先に見える尖塔がスカイツリー。いまや、東京の旧市街地区で唯一残った高層建築だが、実は70年前に作られた歴史遺産である。当時、電波を使って行われていた平面動画映像放送、たしかテレビ放送という名前だったはずだが、そのためのアンテナ塔として建てられたものだ。先端までの高さは650mと、当時としては最高レベルの高さだったらしい。その頃、東京都心は200m級の高層ビルが乱立していて、そうしたビルの影響を避けて電波を送るために、この高さの塔が必要だったのだそうだ。ちなみに、先代の電波塔は東京タワーと呼ばれて、この半分の高さだったそうだが、老朽化のため、300年前の建造物集約の際、取り壊されてしまった。

「なんか、いまひとつエレガントじゃないのよね、これ。先代の東京タワーのほうが残す価値があったんじゃない？」

美月も目を覚ましたようである。

「まあ、そう言うなよ。そういえば、パリにはまだ、その時代以前の塔が残ってるんだっだよな」

「そうよ、エッフェル塔ね。正確にはレプリカだけど。産業革命直後に建てられた塔は流石に今まで持たないわ」

「たしか、取り壊す際に、保存運動が起きて、レプリカを作ることと決着したんですよ。歴史の授業で習った覚えがあります」

「どうやらマリナも復活したらしい。」

「そうね。長い間パリの顔だったエッフェル塔がなくなるのには抵抗があったみたい。フランス文化の象徴みたいなものだったのよね。その点、東京はあっさりと壊しちゃったわよね。このへんが文化の違いかもしれないわ」

「東京でも保存運動はあったらしいよ。でも、こっちはホログラム化して残すことになった。だから、今でも特別な日には東京タワーが森の真ん中に出現するんだ。たぶん、今回の花火の夜も見られると思うよ」

「もうすぐ到着だよ、お兄ちゃん」

車は川に沿って広がる住宅地の一角で止まる。緑地の中に背の低い建物が、小さな庭を伴って並んでいる。あまり都会には見えない牧歌的な風景だ。川の土手の並木と、向こう岸のスカイツリーがなんとなくアンバランスな感じもする。これも300年前に大きく変わった。それまでは、ごみごみとした下町の町並みが連なっていたのだが、多くの住民が臨海部や近郊に新しく作られた集合住居地区に移り、この地区には、広大な緑地と、そこに溶け込む形で少数の住宅が作られた。住んでいるのは、当時、ここでの暮らしを希望して、抽選で選ばれた住民たちの末裔と、その後、同じようにしてここに移り住んだ人たちである。俺の家は、親父の祖父の時代にここに引っ越したのだそうだ。

「とりあえず、みんな、一度うちが上がってゆっくりしていくといい。女子たちは後で、星野さんのお宅まで送ってあげよう」

親父はそう言うと、俺たちを家に招き入れる。俺にとっては1年半ぶりの我が家だが、お世辞にも立派とは言えない家に、みんなを招き入れるのは少し恥ずかしい気がしないでもない。

「皆さん、どうぞ！狭い家だけど、遠慮しないで上がってください」

「だから、お前が仕切るな！」

「だって、今回はお兄ちゃんもお客さんの一人だしさあ、沙依が仕切ってもいいじゃない」

沙依はちよつとふくれっ面になる。正直言うと俺もこの顔にはちよつと弱い。

「わかったわかった。それじゃ、たのむよ。粗相の無いようにな」

「りよーかい。お兄ちゃんっ！」

「ふーん、ケンジは沙依ちゃんに弱い・・・つと。メモメモ・・・」

脇からケイが俺の顔をのぞき込んで言う。

「あのなあ、どうして俺がこいつに・・・」

「そうね。ケンジが妹に弱いつてのは興味深いわ」

美月も後ろで、ちよつと意地悪そうに言う。ほらみろ、こうしてこいつらに俺の弱みを、というか俺をイジめるネタを与えてしまうのを俺は恐れていたわけで。

「あら、お帰りなさい。早かったわね」

そういつてキッチンのほうから顔を出したのはお袋である。

「ただいま。みんな元気そうでよかったよ」

「ケンジもね。あ、皆さんいらっしやい。今お茶を入れるわね。こちらへどうぞ」

俺たちはリビングに入ってテーブルに座る。さすがにこの人数だと、かなり窮屈だ。

「狭くてごめんなさいね。皆さんのお話はよくケンジから聞いてます。仲良くしてもらってるみたいで、ありがとう」

そう言いながら、お袋はティーカップをテーブルにおいていく。沙依がそれにお茶を注ぐ。

「あ、お手伝いします」

とマリナが席を立つ。

「いえいえ、お客様ですから、お気遣い無く。クレアさん」

そう言ったのはお袋ではなく沙依のほうだ。しかし、この笑顔が俺には怖い。

「あ、私のことはマリナでいいですよ。でも、大勢でお邪魔してご迷惑じゃなかったですか？」

「とんでもない。いつも兄がお世話になってますから。それに私も一度皆さんにお会いしたかったのです」

いったいこいつは何を企んでいる？ だいたい、沙依がこういう猫つかぶりな態度を取るときは、何かよからぬことを考えている時だ。ちよつと注意しておこう。

「すまないねえ、狭い家で」

そう言いながら親父が入ってきた。そうやって家族全員が、狭い家を強調すると、それはそれで少々情けないのだが……。

「じゃ、皆揃ったところで、紹介するよ。マリナ・クレア、うちのクラス委員、生徒会の役

員でもあるんだ。実習ではメデイカル担当だ」

「マリナです。初めまして。よろしくお願ひします」

「えっと、それからサマンサ・エドワーズ、C&I担当」

「初めまして。エドワーズです。サムと呼んでください」

「沢村ケイ、札幌出身のナビ担当」

「初めまして。沢村です。あ、私もケイでよろしく」

「で、星野美月・ガブリエル、俺と同じパイロットだ」

「星野です。初めまして。美月と呼んでもらった方が私も気楽ね」

「ガブリエルって・・・」

「なんだ、親父？」

「あ、いや、すまん何でも無い。続けてくれ」

「最後に、ジョージ・エイブラムス、エンジニアリング担当。なんとアカデミーのセンターコンピュータをハッキングしたトンデモ野郎」

「おいおい、その話は・・・。あ、エイブラムスです。僕もジョージでお願ひします」

「で、こちらがうちの家族。親父と妹の沙依はもう知ってるよな。こっちがお袋だ」

「不祥ケンジの母です。よろしくね」

「あ、自己紹介はまだだったね。ケンジの父です。息子が世話になってるね」

「私も・・・ね。中井沙依です。中学二年生、中井家の長女兼妹です。よろしく」

「なんだ、その兼、妹ってのは？」

「え、お兄ちゃんの妹だからだよね」

「そりゃそうだが・・・。ま、いいか。とりあえず堅苦しいのはこれくらいにしよう」

「そうだな、皆さん、長旅で疲れただろうから、少しゆっくりしていくといい」

「女子たちは、美月さんのお宅に泊まるのよね。まだ時間もあるし、ゆっくりしていくといいわ。そうだ、沙依、あれお出しなさいよ」

「やったあ。了解です」

沙依は満面の笑みで敬礼すると、キッチンの方から箱を持ってくる。

「はい。好きなのをどうぞ。これ、新銀座のちょっと有名なお店のケーキなんですよ。皆さんを迎えに行く前に調達しておきました」

「てか、お前が食いたかったんじゃないのか？」

「ま、そうだけどねえ。こんなことでもない、なかなか食べられないから」

あいかわらず調子のいい奴め。結構、図々しい奴なことは間違いないのだが、このあつげら

かんとした性格故に、かなり得をしている沙依なのだ。うちのメンバーだと、ケイあたりとい
い勝負をするかもしれない。

「美味しそうですね。ありがとうございます」

「おお、なんだか目が覚めるような甘い香りだ。新銀座っていうと、例の店だよ。札幌に
も支店はあるけど、本店のを一度食べてみたかったの」

そんな感じで、俺たちはお茶とケーキで一息つく。

「静止軌道からのフライトは長かったでしょ。退屈したんじゃないの？」

「そうでもなかったよ。ファーストクラスだったし」

「ファーストって、あんたそんなお金よく持ってたわね」

「あ、ちよつと訳あってアップグレードしてもらえたんだ。全員ね」

「ケンジと美月のおかげよね」

ケイがまた余計なことを・・・

「どういうこと？ シャトル運輸会社にコネがあるとかって話じゃ無いわよね」

「コネ・・・というか、機長が知り合いで」

「知り合い？先輩とか？」

こういう突っ込みはお袋が得意とするところなのだが、話がどんどん核心に向かってしま
うわけで・・・

「いや、実は入学式に行くときの便の機長さんだった人で」

「え、そうなの？ そういう偶然であるのねえ。でも、あの時は本当に心配したのよ。ニ
ースで流れた便名を見たら、ケンジが乗った便じゃない。お父さんもお母さんも生きた心地が
しなかったわ」

「お母さん、沙依も忘れないでよ」

「そうね。沙依なんか泣いちゃって大変だったんだから」

「お母さん、それは恥ずかしいから、やめて」

「無事だっつてわかるまでは、何も手につかなくて、ずっとニュースばかり見てたよな」

「そうそう。で、無事はよかったんだけど、今度はいきなりインタビューだものね。もうお
母さん、気が気じゃなかったわ」

ほら、結局こういう話になってしまふ。お客さんそっちのけで、内輪の話もないだろう。俺だけなら、適当にごまかしておけばいいのだけど、美月がいるのは、かなりやりにくい。

「そういえば、去年は美月さんとは別のクラスだって言ってたわよね。今年は一緒になったの？」

「ああ、色々あってね」

「お兄ちゃん、色々ってどういうこと？」

いかん。これはまずい。話が美月の方に行ってしまうと收拾がつかなくなりそう。

「私も聞きたいわね。色々ってどういうことかしら？」

ほらきた。ちよつとした一言が墓穴になるわけで・・・

「まあ、そりや色々だろう。入学以来顔を見ていなかった奴が新学期に突然現れたんだからな」

ちよつと苦しいごまかし方だが、ここで本当のことを言うと、たぶん美月が火を噴くから口が裂けても言えないわけ。

「私も入学式以来でしたから、気になっていたんですよ。また会えて、それも同じクラスで同じチームって偶然にしても、不思議な縁ですよね」

そうです。マリナさん、いつも絶妙のフォローをありがとうございます。

「縁・・・ねえ。たしかにそれはあるわね。もともとケンジとは腐れ縁だけど」

「悪かったな腐れ縁で」

「そうじゃない？だいたいあのシャトルに乗り合わせた時点で既に十分臭ってた気がするんだけど、また同じクラスで同じチームなんてね、本格的な腐れ以外の何物でも無いわよ」

美月の奴、ここが俺の家だって事も忘れて、いつもの雰囲気に戻ってしまったんじゃないか。少しは猫をかぶれよ。

「楽しそうね。よかったじゃない。お友達がたくさんできて。母さんもひと安心よ」

「そうだな。実は附属高なんか行って、うまくやれるか心配だったんだが」

「あのなあ、やめてくれよ恥ずかしいから」

「沙依も心配してたんだよ、お兄ちゃん。春も帰ってこなかったしさ」

いかん。こういう話は、せめて女子たちが帰ってからしてほしいのだが。そろそろ話題を変えないとまずい。

「春休みは短いからな。色々忙しいんだよ」

「いったい何が忙しいのかなあ」

沙依はにやりと笑うと女子たちの顔を見回す。これは本当に話を変えないと、話を変な方向に持って行かれそうだ。

「ところで・・・」

俺が話題を切り替える前に親父が口を開く。

「2年になったら実機を飛ばすんだろ。どうだ、自分で宇宙を飛んだ感じは？」

「自分で・・・っても、ほとんどコンピュータがやってくれるんだけど、悪くないよ」

「使ってるのはST1Bだったよな。ちよっと旧式だからコンピュータの性能はいまいちだそうだが」

「それが、実は俺たちのST1Bは特別製のさ」

「特別製ってのは、どういうことだ？」

「実はフライトコンピュータは、2Aシリーズ用のを搭載してるんだ」

「なんだって？2Aと言えば最新型の奴じゃないか。でも、自律制御まではできないだろう」

「それが、実はできたりする。もちろん、ハードウェアは対応出来ないからソフトウェアでのシミュレーションだけだな」

「シミュレーションって、どういうことだ？詳しく聞かせろよ」

身を乗り出す親父の脇でお袋が咳払いをする。

「久しぶりにケンジが帰ってきて、お友達もいるのに、そう言う話は後にしなさいよ。まったく、本当に子供なんだから、あなたは」

「おお、すまん。つい・・・」

親父は我に帰って頭をかく。昔からこういう話になると、目を輝かせて子供みたいになるのが俺の親父だ。

「その話は今夜ゆっくりジョージから聞くといいよ。なんせ、全部ジョージがやったことだから」

「そうなのか？そりや楽しみだな。ジョージ君、そう言えばさつきセンターコンピュータをハッキングしたとか言ってたな。その話も聞かせて欲しいな。あの適応防御システムをどうやって破ったのか」

「あなた！」

「すまん・・・」

親父はちよつと赤面する。こういう話は昔から親父の領分だ。話し出すと時間を忘れてしまう。まあ、俺も子供の頃は、そういう話を楽しみにしてはいたのだけど。そんな感じで、あとは和気あいあい、とりあえず無難な茶飲み話に花が咲いたのである。